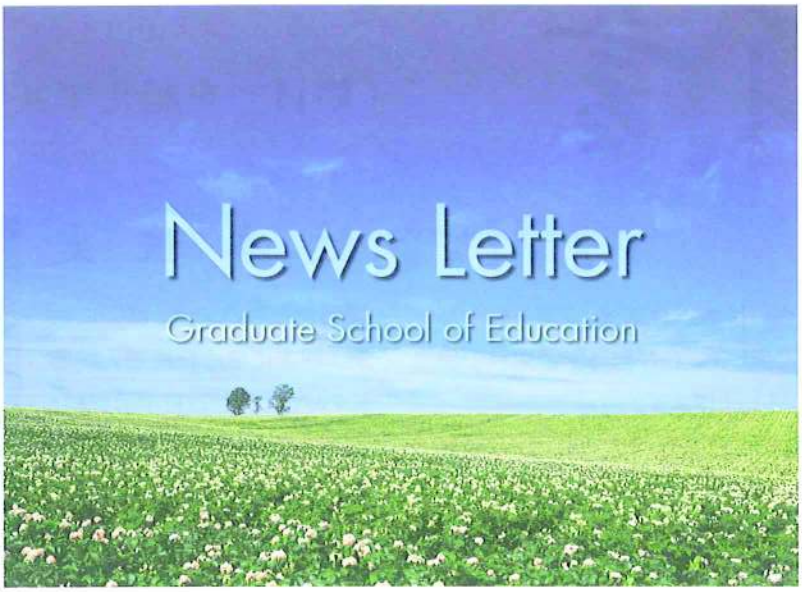
京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

No.20



2010.6

（目次）

● 巻頭言
「節目」を越えて、未来を創る・・・・・・・・・・・・・ 研究科長　学部長　辻本雅史・・・・・・・・・・・・2

● 研究ノート
院生から・・・・・・・・・・・・・ 教育認知心理学講座　修士課程２年　中山真孝・・・・・・・・・・・・3

● 社会人院生から・・・・・・・ 教育科学専攻　専修コース１回生　谷口智恵・・・・・・・・・・・・3

● 学部生から・・・・・・・・・・・・・・・・現代教育基礎学系４回生　田中友香里・・・・・・・・・・・・4
・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 教育心理学系４回生　西尾ゆう子・・・・・・・・・・・・4
・・・・・・・・・・・・・相関教育システム論系４回生　中島悠介・・・・・・・・・・・・4

● グローバルCOE：ランカスター大学との学術交流事業
・・・・・・・・・・・・・・・教育認知心理学講座　准教授、ユニットＡ　齊藤　智・・・・・・・・・・・・5

● 教育実践コラボレーション・センターから
・・・・・・・・・・・・・・・・コラボレーション・センター関連　助教　趙　卿我・・・・・・・・・・・・5

● 臨床教育実践研究センターから
・・・・臨床心理実践指導学講座　教授、臨床教育実践研究センター長　角野善宏・・・・・・・・・・・・6

● 事務室から
耐震改修工事を終えて・・・・・・・・・・・・・・・ 専門職員（会計掛長）　成井明徳・・・・・・・・・・・・7

● 図書室から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 図書掛　山本健太郎・・・・・・・・・・・・8

● 留学生から・・・・・・・・・・・ 心理臨床学講座　修士課程２年　張　善花・・・・・・・・・・・・8

● 諸記録・・9～11
①おもな出来事 ②入試結果 ③学位授与件数 ④教育職員免許状取得状況 ⑤人事異動
⑥科学研究費補助金 ⑦ハラスメント防止に関する研修会

● 諸報
新任教員、事務員紹介・・12

巻頭言

「節目」を越えて、未来を創る

教育学研究科長
教育学部長
辻本雅史

教育学研究科のニューズレターは本20号から、卒業生のみなさまにもお届けすることになりました。わが教育学研究科の現況のお知らせも含めて、ご挨拶申し上げます。

昨年の2009年度は、いろいろな意味で、私たちにとっては大きな節目の年でした。

第一に、教育学部創立60周年を迎えました。人で言えば還暦にあたり、一つの時代の区切りといえます。京都大学教育学部同窓会（京友会）の手厚いご支援のもと、『京都大学教育学部六十年史（一九八九―二〇〇九）』の刊行や「教育学部創立60周年記念祝賀会」の挙行（6月14日）などの記念事業を、無事に行うことができました。関係各位に改めてお礼申し上げます。この60年の間、4000名にのぼる卒業生を世に送り出してきました。私どもは確かに小さな学部でありますが、学問研究と教育の諸分野および関係諸機関等での同窓のみなさまのご活躍ぶりを思えば、その果たしてきた歴史的役割は小さくないと自負しております。今年はその61年目、新たな時代に新たな歴史を刻んでいきたいとの思いを強くいたしております。

第二に、教育学部本館の耐震改修工事を行いました。本館は、1965（昭和40）年の竣工ですから、半世紀近い歴史を刻んできたことになります。大半の卒業生のみなさまの思い出が、この本館にはこもっているはずです。昨年7月からの教職員・学生分散しての仮住まいを経て、この3月末に、本館は新築と見まがうばかりに見事に生まれ変わりました。香りも新しいこの学舎で新入生を迎え、新たな活動を再開しているところです。それを機に、本館内部の再配置を若干行いました。なかでも図書室の機能を地下に集中し、閲覧室と書庫を拡充できたことが大きいことかと思います。

第三に、2004年に法人化されてから最初の6年が経過し、無事第1期を終えることができました。思えばこの6年間、社会の要請に応えるべく、教育・研究活性化をめざした「改革」の連続でした。国立大学創設以来、最大の試練の時期であったかもしれません。まさに試行錯誤の連続でした。各種の大学教育GP（大学教育支援事業）や2つのCOE（世界的教育研究拠点プログラム）などの外部資金の獲得も、こうした「改革」を目指した活動の成果のあらわれです。幸いにも第1期末になされた法人評価において、わが教育学研究科・教育学部は、ごく一部を除き、高い評価を得ることができました。今年は、第2期の「中期目標・中期計画」を着実に実行していくその第一年目にあたっております。この間、わが研究科の進路を誤ることなく的確に導いてこられた藤原勝紀元研究科長、川崎良孝元研究科長、矢野智司前研究科長のご尽力には、敬意をこめて感謝申し上げます。

法人化後、わが研究科は、（1）理論と実践の融合、（2）国際化、（3）卓越した若手研究者の養成、（4）教育／研究におけるフィールドの重視、この4つを柱とした改革に取り組んできました。その推進のために、現在、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際拠点」および特別教育研究経費（教育改革）による「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」のプログラムを展開しています。とくに後者のプログラムは、研究科内に設置された教育実践コラボレーションセンター（通称、コラボ）が中心となって推進されています。私たちは、附属学校を持たない数少ない国立大学教育学研究科です。その分、学校はもちろん、学校を越えた多様な場に新たなフィールドを切り拓いてきました。すなわち「学校教育改善」「新しい教育関係」「教育的空間創造」の3ユニットに、現職教員対象の「E・FORUM」も加え、人の心や教育にかかわる学問・教育のフロンティアを拡大して活動しています。今後も「コラボ」の方向性を強化し、理論と実践を融合し、研究と教育を統合し、次世代の卓越した研究者養成に努めるとともに、新たな学問の創出をめざして進んでいくつもりです。

教育は未来を創るいとなみです。変化の激しい現代は、その未来が見通しにくい時代。その分、教育と教育にかかわる諸学問への期待は大きくなっています。こうした使命を自覚して、大きな節目を越えた私たちは、夢のある未来を創るために、よりいっそう、力を注いでいきたいと念じております。ますますのご理解とご協力をお願いいたします。

研究ノート

院生から

教育認知心理学講座　修士課程2年　**中山真孝**

こんにちは、教育認知心理学講座M2の中山真孝といいます。「研究ノート」ということでとりあえず私の研究を紹介してみようかと思います。私が研究しているのは真似る力、模倣能力についてです。誰かの行為を見て、それを模倣して自分も同じ行為を行う、あるいは、誰かが言った言葉を聞いて、それを模倣して自分も同じ言葉を言ってみる。この能力は、道具の使い方や言葉（言語）を覚えるのに非常に重要です。それだけにとどまらず、相手を真似てみるというのは相手を理解するのにも役立ちます。相手のしていることと同じことをとりあえずしてみる、相手の言葉を繰り返して反芻してみる。そうしてみることで「ああそうか」と体験的にわかったという経験はあると思います。さらに、模倣というのは、学んだり、理解したりするのを支えてくれるだけでなく、それ自体創造的になりうると思います。そのまま真似するのではなく、その行為なりから何らかの意味を汲み取り、それに基づいて、その行為を再び産み出す。そのような過程は思いがけないものを産み出してくれるのではないでしょうか。

ところで、この模倣能力については心理学では、行為の模倣・言語の模倣として別々の分野で研究されてきました。それらを統合し、同じ模倣能力として共通性を探ってみようというのが私の研究テーマです。心理学にとどまらず、神経科学の知見や進化的な視点、さらには哲学的な考察も視野に入れて研究を行っています。この私が試みていることは、まさに模倣で、ある分野での研究（実験）を再現（模倣）すると同時に、その実験を模倣した同様の実験を別の分野でもその理論的背景を踏まえる形で行うことで、新たな知を創造しようとしています。

そういうわけで、研究の内容としても、指針としても、模倣というものの素晴らしさを感じつつ研究を行っております。

社会人院生から

教育科学専攻　専修コース1回生　**谷口智恵**

私は、図書館司書として姫路市立図書館に勤務しています。大学で図書館司書資格を取得し、1990年に図書館司書として姫路市に採用されて以降、現在に至るまで姫路市立図書館に19年間勤務し、実際に公立図書館の現場で利用者と接しながら実務をしてきました。この間にほとんどすべての図書館業務を経験しています。現場に勤務する実務者として数え切れないほどの利用者と接し、姫路市民への資料提供を第一に利用者の知的自由を保障することを常に考えながら仕事をしてきました。

しかし、最近の公立図書館を取り巻く環境は指定管理者制度の導入や窓口業務委託など運営形態の多様化が進み、図書館業務の市場化テストが検討されるなど、1970年以降目指すべき図書館像とされた『市民の図書館』が揺らいできています。また、図書館司書の専門性についても図書館界ではさかんに議論され、あるべき図書館像や図書館司書の専門性のあり方はまさに百家争鳴状態であり、変革の時代といわれる公立図書館の今後はどのように変化していくのか先行きは不透明な状況にあります。このような複雑な現状にある図書館界でどのように図書館像を構築し、図書館司書の専門性を持ち続けていくのか、本当に市民に必要とされる図書館サービスはどうあるべきなのか、運営形態の多様化によって市民の受けるサービスの格差をなくす経営はどうするべきなのか、すべての図書館サービスを包括する知的自由をどのように保障していくのか。そのようなことに問題意識をもつようになり、しだいに自らテーマを持ち研究を深めたいという意欲を持つようになりました。

また、現在の私は図書館司書としての人生のちょうど半分に来ています。今まで実務者として仕事をしてきたことを集大成し、大学院では、知的自由の保障、多様化する運営形態における図書館像の再構築、サービスの格差の解消をテーマに知識を深めたいと考えています。特に公立図書館の最も根源的な部分である知的自由の保障について研究したいと考えています。運営形態が多様化すると知的自由の保障にも影響が出てくることは確実であり、知的自由の保障を研究することは今後の図書館像を考える上で重要なことと考えています。大学院で得た知識は実務者として現場で活かし、あと半分の図書館司書としての人生をより専門的に、利用者の視点に立った図書館サービスの仕組みを考えていきたいと考えています。

学部生から

現代教育基礎学系
4回生

田中友香理

教育学部生として、4年目。長いようであっという間の4年間でした。私は、教育について、広い視野から見つめなおしてみたいと思い、この学部に入りました。学部の授業は、予想以上に興味深いものが多く、どの授業も、色々な立場、方法で「人間とは何だろう。教育とはどうあるべきなのだろう」という問いに向き合っています。私は、人が変わっていく姿に、直接的に関わっていきたい、という思いから、発達教育の授業やゼミに参加し、現在は卒業論文の準備を始めています。

教育学部は、構成人数が少なく、規模の小さい学部であるといえます。しかし、その分、学生間だけでなく、先生とのつながりも深く、授業外で色々な相談に乗っていただくこともあります。学生間のつながりも、学年の枠にとらわれず、卒業された先輩方が、進路などを気にかけてくださり、後輩にも同じように何かできることはないかと考えている自分に気づかされます。

私は、ただ学ぶ場所としてだけではなく、人間が育つ場所として、教育学部の素晴らしさを感じています。今後は、自分の学問をより深め、この学部で築くことのできた人とのつながりを大切にしていきたいと思います。

教育心理学系
4回生

西尾ゆう子

ラウンジの窓から、はなみずきの白い花が春の光をあびて揺れているのが見えます。ちょうど1年前の今頃、私は教育学部3回生に編入学しました。同期の編入生は5人でした。年齢もバックグラウンドも興味も皆それぞれバラバラでしたが、すぐに意気投合し、お互い励ましあいながらこの1年を過ごすことができたのではないかと思います。

教育心理系の授業では、認知・臨床・発達の3分野について幅広く、かつ体験的に学ぶことが出来、とても充実した1年でした。その一方で、入学前に思い描いていた期待と現実のギャップに直面し、「ここで自分のやりたいことが本当にできるのか」と悶々と悩んだ時期もありました。おそらく、関東から関西へ、異分野から臨床心理学へ飛び込んできた私は、色々な意味でカルチャー・ショックを経験したのだと思います。そんな私を支えてくれたのは、親身になって話を聞き、率直な意見をくれた友人や先輩、先生方でした。今は、そうやって揺れた一時期を過ごしたおかげで、以前よりも肩の力を抜いて、前向きに取り組めるようになったと感じます。

今年の山は卒業論文です。今までお世話になった方々への感謝を力に変えて、ていねいに進んでいきたいと思います。

相関教育システム論系
4回生

中島悠介

様々な偶然が重なって教育学部に入学してからはや三年余。この大学で最も身に感じられたことは「求めれば求めるほど多くのものが手に入る」ということである。親身で丁寧な指導をしていただける先生方、志を高く持つ多くの仲間、教育を様々な視点から見つめられる学習環境、書庫に眠る膨大な資料、課外活動・課外学習のサポート… 自由な環境は自身のマネジメント力を養う絶好のチャンスであり、4年間を充実させることも無為にさせることも自分次第であることを実感できる場であった。

私自身は3年間、学園祭実行委員会での活動と勉学を両立させ、現在は西アジアの湾岸地域における高等教育に焦点を当てて卒業論文に取り組んでいるが、「自身のやりたいことを自分らしく、存分にできる環境」を本当に幸せに感じている。これまでの大学生活で多くのものを得たことを自負しているが、これからは、自身の知見を広げていきながらも、自身の得たものを如何にアウトプットしていくか、社会へ還元していくかということが求められる。

卒業論文、研究、仕事… 様々な形の中で自分には何ができるのか、常に振り返りながら、日々精進してきたいと思う。

グローバルCOE:ランカスター大学との学術交流事業

教育認知心理学講座　准教授、ユニットA　齊藤　智

教育学研究科とランカスター大学心理学部は、2006年10月に学術交流協定を締結しました。これはグローバルCOEプログラムが動き出す以前のことで、締結の経緯については、「魅力ある大学院教育」イニシアティブの報告書（2007年1月発行）に詳述しています。ここでは、グローバルCOE・ユニットAの活動として実施された、ランカスター大学との学術交流事業について紹介させていただきます。

2007年12月には、京都大学百周年時計台記念館において、国際シンポジウム「Executive Function in the Mind」が開催されました。この事業の目的は、国際最高水準の研究者による最先端の研究発表を基軸にしつつ、大学院生の自主的な意見交換の場を設定し、国際研究集会への参画を促すことでした。この趣旨に沿って、テーマ設定、企画運営のすべてを大学院生が担当するという国際セミナーを、シンポジウムのサテライトとして開催しました。テーマは「Cognitive and Developmental Sciences」というもので、京都大学とランカスター大学の大学院生等若手研究者が発表を行い、シンポジウムの招待講演者と様々な議論を交わしました。

2009年7月には、2回目となるランカスター大学との合同国際シンポジウムが開催されています（第1回は2006年にランカスター大学において開催）。テーマは「New Directions of Memory Research」というもので、京都大学とランカスター大学の記憶研究者が、双方の持ち味を発揮して刺激的な研究発表を行いました。会場での活発な議論には大学院生も加わり、人材育成という観点からも大変有意義であったと感じています。

ランカスター大学との交流は、教員同士の共同研究から開始され、いわばボトムアップ的に形成されてきたものです。

学術交流協定を締結したことで、教員や大学院生の研究交流は、以前にも増して活性化することになりました。その結果、いくつかの優れた学術的成果が、この数年の間に同大学との共同研究から生まれています。それらは、ランカスター大学のホームページ（http://www.psych.lancs.ac.uk/res/partners.html）にも報告されていますので、ご覧いただければ幸いです。

教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連　助教　趙　卿我

教育実践コラボレーション・センターは、京都大学大学院教育学研究科の「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」を推進すべく、2007年4月に新設されたセンターです。本センターの目的は、現場から持ち込まれた具体的な問題に対し、異分野融合チームを組織するなど教育学研究科としての専門的かつ組織的な対応が可能となるよう、一連の活動をコーディネートすることにあります。その際、子どもをめぐる教育問題の中心を、「生命性を深めること」（心の問題）と「有能性を高めること」（学力問題）の2点として機軸に据え、総合的な子どもの能力育成の方法を研究・提案していくことを目指しています。またそれと同時に、教育研究におけるマクロ的アプローチ（教育制度学や教育社会学、比較教育学）とミクロ的アプローチ（認知心理学や心理臨床学、教育哲学）を統合した研究を行い、教育に関する深い知識と高い専門性を維持することが、本センターの役割であると考えています。

本センターは、「学校教育改善ユニット」「新しい教育関係ユニット」「教育空間創造ユニット」「E.FORUM」という4つのユニットを活動の柱として、今年度も教育現場とのコラボレーションを進めていきたいと考えています。まず、「学校教育改善ユニット」では現在、京都市立高倉小学校、寝屋川市立田井小学校をフィールドとして、教師の授業力を高めるために、本学大学院生が、授業の計画・観察・振り返りを現場教師とともに実施する取り組みを進めています。また、「新しい教育関係ユニット」では、不登校の子どものための学校である京都市立洛風中学校において、事例を検討するカンファレンスなどを通じ、学校運営に関して助言を行っています。「教育空間創造ユニット」では、京都府で唯一の「村」である相楽郡南山城村の野殿・童仙房地区において、大学院生が中心となって、住民と協働して新しい教育空間を創造する試みに着手しています。「E.FORUM」は学校や地域の教育改革を推進するスクールリーダーの育成、力量向上を図るため、毎年、研修を提供しています。こうした各ユニットにおける個別のコラボレーションを今後は、領域横断的で組織的なものへと発展させることを目指します。また、学校が抱える実践的問題を本センターが窓口となって受けとめ、問題を厳選した上で検討し、研究科としてその理解と対処に取り組む体制の強化をはかる予定です。

本センターは教育学研究科の進める大学院生の主体的研究プログラムである「研究開発コロキアム」や、中国や韓国との国際的な学術交流の取り組みとも連携しています。今後もこうした研究プログラムや関係機関と活動を共にしながら、以上の取り組みを進め、実践的・学術的に貢献していきたいと考えています。今後とも教育実践コラボレーション・センターの活動にご理解とご協力をいただき、ご助言を賜りますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座　教授、臨床教育実践研究センター長　角野善宏

臨床教育実践研究センターは、京都大学大学院教育学研究科の附属施設であり、その主な業務は、心理教育相談室における心理相談活動です。この心理教育相談室は、一般市民に向けて開かれた相談機関であり、心理的・精神的な諸問題について専門的な相談活動を展開しています。社会のなかにおいて、こころの問題に関して心理臨床の観点から取り組みを必要とする事態が様々な形で顕在してきた今日的状況にあって、相談を求めてくる人たちに専門的対応ができる場を提供する機関として、ますます重要な役割を果たしてきていると思われます。

また、本センターは臨床教育学上の固有の実践的課題に密着した学問的研究分野として、臨床実践学・臨床人間形成学・臨床人間環境学・臨床実践指導研究の4分野から構成されています。臨床実践学分野では、いじめ・不登校など心理・教育問題の相談や大学院生、教員などに対する臨床の「個別集中指導（スーパーヴィジョン）」による専門家養成を行っています。臨床人間形成学分野では、臨床群の特性と一般健常児の人間形成過程の実証的比較研究、人間形成に関する基本的・総合的研究を行っています。臨床人間環境学分野では、いじめなどの背景にある社会病理、家庭、学校など人間を取り巻く環境を含めた複合的研究や病理知見を教育・学校教育コンサルテーションに提供しています。臨床実践指導研究分野では、臨床実践指導に関する開発研究、個別的な臨床実践教育、研究指導の在り方に関する実践研究、そして臨床実践指導者の養成を行っています。また、これらの分野は、相互に教育学研究科内での相談研究協力や資料提供を通じて連携を行っています。

そして、教育学研究科はもとより、京都府や京都教育大学をはじめ、教育委員会、教育センターなど学内外にある協力機関とも連携し、他大学の教授等を客員に招くとともに、外国人客員教授を毎年招聘して、実践研究を推進し、その成果を市民や専門家に対する公開講座等を開催して社会に還元しています。さらに、学校現場で起きる多種多様な子どもたちの問題、たとえば非行・不登校・親の問題・こころや身体の問題などを考えるために、幼稚園・小学校・中学校・高等学校教諭、養護教諭、そしてスクールカウンセラーなどの学校教育に関わる専門家を対象にしたリカレント教育講座を毎年2日間にわたって開講しています。

以上、本センターの存在は、すでに広く市民および他の教育機関、さらに医療機関等にもおいても定着し、近年とくに子どもの問題が多発する状況の中で、我々の責務は重くなっていると痛感しています。

事務室から

耐震改修工事を終えて

専門職員（会計掛長）　成井明徳

上の図は着工前のイメージパースですが、改修後の出来栄えはどうでしょうか。

教育学部本館耐震改修工事竣工後2カ月及び移転終了後1カ月が経過し、落ち着いてきた頃かと思われますが、いかがでしょうか。（実は移転作業はまだ続いております。）

昨年の4月に教育学研究科会計掛に着任以来、耐震改修工事関係で駆け回った1年を振り返りたいと思います。

耐震改修工事で大きな問題点は、移転→仮移転先→移転（復帰）と短期間の間に移転作業を2回行うことと仮移転先の確保及び教育・研究環境の維持のための整備が必要なことです。特に教育学研究科の場合、自前で仮移転先を確保できないため、教員・学生の居室に学内外7カ所、図書、書籍類の保管用及び仮移転先が狭隘であるため保管物品の倉庫用に学内外8カ所と分散することとなりました。以上をふまえて1年を振り返ってみると、

4月：施設環境部打合せ（設計）、研究科内会議、仮移転先下見、倉庫手配
5月：施設環境部打合せ（設計・ヒアリング）、研究科内会議、仮移転先借入手続き
6月：施設環境部打合せ（設計）、研究科内会議、仮移転先整備、移転日程調整・確定、移転物品調査
7月：施設環境部打合せ（設計）、研究科内会議、仮移転先へ移転、仮移転先整備
8月：不用物品の見学会開催、仮移転先整備、書籍類・保管物品移転、不用物品廃棄
9月：事務室移転、サテライト室整備
11月：施設環境部打合せ（内装等）、附帯設備調達
12月：施設環境部打合せ（プロット図確認）、供用部分レイアウト
1月：施設環境部打合せ（内装等）、移転日程調整
2月：建物改修に伴う各種届出書類の作成、移転日程確定、借入物件返納手続き
3月：仮移転先より移転（復帰）、倉庫保管物品・新規購入物品・書籍類の搬入、仮移転先・借入物件原状復帰、不用物品廃棄、関連追加工事等
4月：仮移転先・借入物件原状復帰、不用物品廃棄、防犯システムの整備

以上のように、毎日何等かな業務を行っていたかと思います。特に、6・7・2・3月は一日中駆け回っておりました。

この中で特筆すべきは、旧洛東病院近衛寮の整備でしょうか。この建物は約37年前に当該病院の看護婦寮として建築された建物で、居室は4畳半で、また1年半ほど使われておらず、劣化が著しいものでした。近衛寮は仮移転先としては一番大規模な場所でもあり、教育・研究環境の維持を目的として整備する必要があります。5月から準備はしておりましたが、建物の借入は7月1日からで、入居は7月21日からに迫っておりましたので、整備期間は実質14日間しかありませんでした。主な整備内容は、水道（開栓、高架水槽清掃、水質検査）、電気（電気容量の増量、低圧工事）、電話（電話引込、配線工事）、清掃（居室、廊下、エアコンフィルタ、窓ガラス、除草）、LAN（回線設置工事、ネットワーク構築）、空調（エアコン調査、取替）、その他（カーテン・カーペット・扉錠取設等）で、全て終了したのは近衛寮の移転初日でした。その間他の移転も始まっておりましたので、暑い中、日中は走り回り、夜に通常業務をこなすという非常に充実した日々（?）を過ごしておりましたことは忘れられない出来事です。

さて、耐震改修工事に関してですが、改修後の教育学部本館は内外観とも明るくなり、内部もすっきりしたというのが第一印象です。また、本来改修範囲ではなかったトイレが綺麗になったのが評判が良いみたいです。なお、本工事について、こちらからの様々な要望等に対応していただいた施設環境部の方々に心より感謝しております。

最後に、耐震改修工事を行えば建物は100年持つとされております。教育学部本館は、1番古い個所で竣工後45年経過しておりますので、今後特段の事情がなければ後55年は今の建物を使用することになります。今回の改修を機に大切に使っていただき、教育・研究環境の維持に努めていただきたく望んでおります。

図書室から

図書掛　山本健太郎

図書室は、昨年度の教育学部本館耐震改修工事に伴い2009年7月から2010年3月までの間、休室、窓口移転、休室と変則的な運用をしてきました。

この期間中は利用できる資料が少なく、図書室としての閲覧スペースもなく、使える資料もすぐには出して来られない、といった、ないないづくしで、利用者の皆様には大変不便、ご迷惑をおかけしました。

2010年4月からは耐震改修工事が終わった建物に移り、心機一転、さあ皆さんに使っていただこう！ と言えれば良かったのですが… ここでもまだ戻ってこない資料がいっぱいで部分的にしか利用していただけませんでした。工事後の書庫へ本を再配置していく作業がとても大変で、引越し業者と職員共同で作業をしましたが4月5月とまるまる2ヶ月かかってしまいました。本当にお待たせしました。

ここで耐震前と耐震後の図書室の変更点を簡単にご紹介します。1階にあった閲覧室が地下書庫内に移動しました。もともと閲覧座席数が12席から地下に17席、1階カウンター付近に3席と合計20席に増えました。参考図書は地下閲覧室内に、新着雑誌も地下書庫内に配架しています。1階カウンター付近にある3席は学位論文等、閲覧利用のみの資料のために設けてあります。

OPAC用端末は1階に2台、地下閲覧室内に1台を設置しています。東側の地下閲覧室内では無線LANの提供も計画中です。

地下書庫面積が約1.35倍広くなった結果、地下閉架書庫にあった資料も大部分が開架スペースへと移動し、利用しやすくなりました。

雑誌、紀要が新旧と離れて置かれていたものが、1か所にまとまり、以前よりも格段、探しやすくなりました。工事以前から出納式になっていた資料についても、今後地下書庫内へ移動させる予定です。

今後も皆様にとって少しでも使いやすい図書室へとなるよう、改善していきますのでどうぞよろしくお願いいたします。新しくなった図書室を皆様にたくさんご利用していただけることを、心よりお待ちしております。

留学生から

心理臨床学講座　修士課程2年　張（チャン）　善花（ソン ファ）

修士課程に入学してあっという間に一年生の生活が終わり、2年生になりました。心理臨床学・心理療法という実践的な学問については、韓国・アメリカでも勉強してきたのですが、日本には「京大型心理臨床」を学んでいくために留学しました。来日してから2年間の準備を終え、本研究科に進学したのは大きな喜びでした。

入学式の前から、研究室でのオリエンテーションがあり、緊張感と期待感をもって「臨床」における訓練がスタートしました。特に、毎週行うカンファレンスは、全教員と全院生が参加していて、心理臨床における一人一人の存在感と情熱を感じさせる場であり、共に支えながら成熟していく場でもあると感じました。先生たちの教えと刺激を受けながら学んでいくというプロセスは大変な過程だと言えますが、楽しい時間でもあります。私は、この大変さを喜びながら「臨床」をしっかり学び、身に付けていこうとしています。また、この臨床からの学びを研究に生かして修士論文を書いて、博士課程にも進学するつもりであります。

アメリカでの生活とは異なる日本の生活は韓国人としての私を再発見させる日々の連続でもあります。臨床家になりたいと思っている私はこの過程を一つの旅として生き抜きたいと思っています。もちろん留学生としての大変さもありますが、先生たちをはじめ研究室の院生、事務の方々の支えもありまして、楽しみながら院生生活は順調に進んでいます。

私自身が「京大型心理臨床」を知って今ここにいるのもある偶然の出会いがあったからであります。これからの出会いも大事にしながら、「京大型心理臨床」をしっかり身に付けていきたいと思います。また、日本・韓国交流からアジア、さらには世界に広がる心理臨床に貢献したいと思います。そのため、まず、修士論文という一山を超えようとしています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

諸　記　録

◇2009年12月1日～2010年4月のおもな出来事

【2009（平成21）年12月】

25日（金）　教育実践コラボレーション・センター主催　E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「E.FORUMで学ぶカリキュラム設計B:ルーブリックの作成と活用」（吉田南総合館）

【2010（平成22）年1月】

9日（土）　第3回GCOE主催シンポ（京大「心が活きる教育のための国際的拠点」・慶大「論理と感性の先端的教育研究拠点）「子どものこころの発達と教育～最新の研究成果に学ぶ～」（慶大）

9・10日（土・日）　大学院GP主催セミナー「ギーゲリッヒ博士の夢分析セミナー」（ベルリン）

11日（月）　大学院GP主催ISAP国際シンポ（チューリッヒ）

23日（土）　教育実践コラボレーション・センター主催講演会「ライフヒストリーと生涯学習」G.ピノー博士（ツール大名誉教授、芝蘭会館）

25日（月）　教育実践コラボレーション・センター主催ゼミ「生涯教育と自己教育」G.ピノー博士（ツール大名誉教授、総合研究2号館）

【2010（平成22）年2月】

4日（木）　ハラスメント防止に関する研修会「アカデミック・ハラスメントを考える」カウンセリングセンター講師　中川純子氏

5・6日（金・土）　附属臨床教育実践研究センター主催　第13回リカレント教育講座「『心の教育』を考える－学校の成長と支援－」（百周年時計台記念館）

6日（土）　第6回GCOE主催国際シンポ「日韓メディア研究大学院生セミナー」（百周年時計台記念館）

7－14日　大学院GP主催　幸福・感情・言語に関する国際比較研究（ベルリン自由大学）

9・10日（火・水）　第7回GCOE主催国際シンポ「Happiness, Emotion, Language: Toward an International Comparative Study」（ベルリン自由大学）

24日（水）　第22回GCOE主催講演会「The keys to successful behaviour change: Finding happiness and enjoying good health（行動変容を成功させる秘訣:幸福と健康のために）」D.モンゴメリー博士（オーストラリア心理学会会長、総合研究2号館）

大学院GP主催講演会「『きく』ということ」沢木耕太郎氏（芝蘭会館）

26日（金）　教育学部本館耐震改修工事竣工（3月末移転完了）

【2010（平成22）年3月】

13日（土）　第10回GCOE主催ワークショップ「哲学への権利――教育哲学と哲学教育のあいだ」（人間・環境学研究科）

17日（水）　GCOE・教育実践コラボレーション・センター主催　日中交流シンポジウム『21世紀における日本の教育改革』研究成果報告会（北京・中央教育科学研究所）

18日（木）　第23回GCOE主催講演会「Part Ⅰ - Power distance and uncertainty avoidance in Japanese and Finnish classrooms; Part Ⅱ - Approaches towards English academic writing for translation majors at the University of Helsinki」M.ギャラント博士（ヘルシンキ大教授、吉田南総合館）

24日（水）　教育学部同窓会主催　卒業生歓送会（百周年時計台記念館）

27日（土）　教育実践コラボレーション・センター主催　E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第5回実践交流会」（総合研究2号館）

29日（月）　第24回GCOE主催講演会「乳幼児は社会的理解をどのように発達させるか:「心の理論」の夜明け前」C.ルイス博士（ランカスター大教授、総合研究2号館）

【2010（平成22）年4月】

22日（木）　教育学部同窓会主催　新入生歓迎会（百周年時計台記念館）

◇ 平成22年度入試結果

・教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	50	191	186	52	62
	理系	10	41	40	10	
第3年次編入学		10	18	18	6	5

・教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	18	40(5)	37(4)	21(3)	20(3)
		臨床教育学専攻	14	43	42	8	8
	教育科学専攻(専修コース)		10	37	37	11	11
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名	0	0	0	0
博士後期課程編入学			若干名	9	9	0	0
臨床実践指導者養成コース			4	6	5	2	2

(　)内の数は外国人留学生で内数

◇ 平成22年度学位授与件数

(H22.3.31現在)

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	71
修士	教育科学専攻	30
	臨床教育学専攻	14
博士	課程博士	8
	論文博士	4

◇ 教育職員免許状取得状況

平成21年度(2009)

中学校専修免許状	0
中学校1種免許状	2
高等学校専修免許状	2
高等学校1種免許状	4
養護学校1種免許状	0
養護学校2種免許状	0

◇ 人事異動（H21.12.2～H22.6.1）

平成22年1月8日付け

[redacted]

平成22年2月17日付け

[redacted]

平成22年3月31日付け

デ・カルヴァーリヨ・フィリヨ
モイゼス・キルク助教　(教育認知心理学講座)　辞職
野口　剛　助教　(教育社会学講座)　辞職
高嶋　雄介　助教　(心理臨床関連)　辞職

(任期満了退職)
竹中　菜苗　助教　(大学院GP)
井谷　信彦　助教　(大学院GP)
赤沢　真世　助教　(教育実践コラボレーションセンター関連)

[redacted]

平成22年4月1日付け

辻本　雅史　教授　研究科長・学部長
(任期　22.4.1～24.3.31)　新任
子安　増生　教授　副研究科長
(任期　22.4.1～24.3.31)
前平　泰志　教授　教育研究評議会・評議員
(任期　22.4.1～23.3.31)
副研究科長
(任期　22.4.1～24.3.31)
山田　洋子　教授　現代教育基礎学系長
(任期　22.4.1～23.3.31)
楠見　孝　教授　教育心理学系長
(任期　22.4.1～23.3.31)
髙見　茂　教授　相関教育システム論系長
(任期　22.4.1～23.3.31)
加藤　奈奈子　助教　(心理臨床関連)　採用
趙　卿我　助教　(教育実践コラボレーションセンター関連)　採用

[redacted]

平成22年4月30日付け

[redacted]

平成22年5月1日付け

高嶋　雄介　特定助教　(附属臨床教育実践研究センター)　採用

◇科学研究費補助金

22年度

研究種目	研　　究　　題　　目	研究担当者
基盤研究(A)海外	多文化横断ナラティヴ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発	山田　洋子
基盤研究(B)一般	トランスナショナル・エデュケーションに関する総合的国際研究	杉本　　均
基盤研究(B)一般	ソフト・パワー構築に向けたメディア文化政策の国際比較研究	佐藤　卓己
基盤研究(B)一般	E．FORUMカリキュラム設計データベースを活用したスタンダードの開発	矢野　智司
基盤研究(B)一般	「伝承・習い事」文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究	渡邊　洋子
基盤研究(B)一般	教育資源調達手法総動員による教育組織パフォーマンス向上施策の学際的研究	高見　　茂
基盤研究(B)一般	辺境における空間的・社会的移動と教育 —奄美諸島の経験を基軸とした比較史的研究—	駒込　　武
基盤研究(B)一般	「女性文化人」の社会的形成に関する歴史社会学的研究	稲垣　恭子
基盤研究(C)一般	心理臨床場面における対話の構造	桑原　知子
基盤研究(C)一般	スタンリー・カベルと「大人の教育としての哲学」—人文科学の学際・国際的交流研究—	齋藤　直子
基盤研究(C)一般	批判的図書館史研究の構築	川崎　良孝
基盤研究(C)一般	１９９０年代以降の学歴と初期キャリアの動態に関する比較研究	岩井　八郎
基盤研究(C)一般	音韻的作動記憶を支える意味記憶とプロソディの相互作用	齊藤　　智
基盤研究(C)一般	「活用」を促進する評価と授業の探究	田中　耕治
基盤研究(C)一般	オールタナティヴ教育における「稽古」の思想と「宗教性・精神性」の教育人間学的解明	西平　　直
基盤研究(C)一般	教育空間の変容と自己形成の相互関係についての基礎的研究	前平　泰志
基盤研究(C)一般	ドイツにおける大学自治観の形成と現代における大学改革との連関に関する研究	金子　　勉
基盤研究(C)一般	東アジア諸国・地域における大学院入学者選抜方法の比較研究	南部　広孝
挑戦的萌芽研究	「心の理論」の獲得とプラグマティックな言語理解の発達	子安　増生
挑戦的萌芽研究	女性の教養と理想的女性像に関する比較社会史的研究	稲垣　恭子
挑戦的萌芽研究	三項関係ナラティヴ・ミーディアムの開発 — 糖尿病患者と医師の支援と教育	山田　洋子
挑戦的萌芽研究	「ＮＨＫ青年の主張」における青年文化のメディア社会学	佐藤　卓己
若手研究(A)	ヒトを含む霊長類乳児の感覚統合 — 分化と運動変換に関する比較研究	明和　政子
若手研究(A)	不妊夫婦の喪失と葛藤，その支援 — 見えない選択径路を可視化する質的研究法の展開	安田　裕子
若手研究(B)	認識論的メタ認知と批判的思考の関連性に関する文化比較研究	C·F Moises Kirk
若手研究(B)	科学者の探求手法を体験することで科学的思考を学ぶカリキュラムの検討	中池　竜一
若手研究(B)	パフォーマンス課題の効果的活用に関する国際比較調査	西岡加名恵
若手研究(B)	「現実 - 潜在」関係に関する思想史的研究 — ホリスティックな知の再検討	小野　文生

◇ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高め、ハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成21年度は、平成22年2月4日(木)に開催し、カウンセリングセンター 中川純子講師による「アカデミック・ハラスメントを考える」と題する講演が第二講義室であり、教員、事務職員、学生の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。

諸　報

◇新任教員・事務員紹介
（「　」内は本人の抱負）

[redacted]

～ 編 集 後 記 ～

「ニューズレター20号」をお届けいたします。半年以上にわたる耐震工事も無事終了し、4月より新たなハード（建物）とソフト（気持ち）で教育学研究科棟が再稼働しはじめました。床、天井、部屋の扉。「新築？」と見間違えるほど新たな雰囲気となりましたが、よく見ると以前を思い出させてくれる箇所も多く残っています。階段の手すり、掲示板、壁のキズ。先輩方から継承してきた歴史の重みとともに、研究科は新たな歳月を重ねてまいります。

折しも、本号より、教育学部同窓会の皆様にニューズレターをお届することとなりました。レターを介して、研究科の活動の息吹を生き生きとお伝えできればと思います。（MM）

京都大学教育学研究科
・教育学部広報委員会

委員長　松木　邦裕　教授（臨床心理実践学講座）
委　員　辻本　雅史　教授（教育学研究科長・教育学部長）
委　員　南部　広孝　准教授（比較教育政策学講座）
委　員　明和　政子　准教授（教育方法学講座）
委　員　吉井　　晃　事務長
委　員　河合　明美　専門職員（総務掛長）
委　員　西本　幸江　専門職員（教務掛長）

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075（753）3003